

『変目伝』論

——伝吉の恋の行方と「悲惨小説」——

水野 洋

世に「悲惨小説」「深刻小説」といわれた、その第一作小説『変目伝』^{へめいでん}を、広津柳浪が「読売新聞」に連載したのは明治二十八年の二月から三月にかけてのことである。

この小説の主人公は、小男で顔に醜いやけどの傷跡を持つ、変目とあだ名される洋酒屋の主人伝吉である。伝吉が得意先に行っている薬種店の主人と従兄弟にあたる定二郎は、その店の娘に伝吉が恋慕していることを知り、これをネタに伝吉をだまして金をたかり、やがて破産の危機に瀕した伝吉は質屋の番頭を殺し金を奪ったため、捕えられ死刑になる。

変目に対するあざとい描き方は周到で、読むものに陰惨な印象を与えずにはおかなかった。このような作風は、ちょうど同じ頃、同じく硯友社社員であった川上眉山が『大さかづき』(明二八・一)、『書記官』(明二八・二)『うらおもて』(明二八・八)などの「観念小説」において同様の社会批評的なテーマを描いたことと軌を一にする。『変目伝』における容姿の醜さの強調、そしてなによりも社会的に差別される者を取り上げ問題にした点は、「観念小説」の眉山とともに、情痴や貧富の差を主な題材とした硯友社の作風から踏み出していったことを意味した。これは柳浪が、社内では最年長で、他の社員たちとは一線を画し、尾崎紅葉も一目置いた客将扱いされた存在であったことと、こちらも硯友社社員でありながら、樋口一葉や「文学界」同人などとの交流が深かった眉山という両者の立場に関係があるといえようか。いずれにしても、以前よ

り内田魯庵などから「社会小説」の提唱というかたちで、硯友社に対しては社会性の欠落が批判されていたこともあり、ここに新しい空気を持ち込んだ柳浪や眉山の作は注目され、ともに流行作家に駆け上がり、柳浪の方はほどなく紅露の二大家をしのぐほどの名声と収入を手に入れることになるのである。

他のいくつかの「悲惨小説」と同様、この話には柳浪自身が聞いた実際の事件が存在したようである。

『変目伝』の趣向は、横浜に或洋酒屋があつて、其所の若者か何か女郎買ひの為に金に窮して、質屋の番頭をおびき出して殺した話を当時聞きました但其れから出来たのです。彼の中にある医者の方は、是れも当時横浜にあつたので、夜更けて病家先から呼びに来て出たぎり行方知れずに居たのが、絞め殺されて、宙にさがつて頭が立つたやうになつてゐたといふ伝説を挿んだのです。

『唾玉集』

この通り小説『変目伝』においても、洋酒屋の若者が金に窮して質屋の番頭をおびき出して殺す話に、それと直接関係のない、陰惨な殺された方をした医者の方の殺人事件が挿さまっている。女郎買ひのため金に窮して犯罪を働くというのは特に珍しい話ではないだろう。実際にその当時で

も「産を耗し人を殺すに至る事の顛末は、人の同情を惹くに宜き材にあらず」（『雲中語』）と評されている。ただし、出来上がった小説はこのありふれた話に肉付けしたという程度の簡単なものではなかった。柳浪が聞いた話と『変目伝』との違いを挙げてみると、『変目伝』では、洋酒屋が横浜から東京に移されており、また「悲惨小説」といわれるのにふさわしく身体に障害を持つ人物を主人公に仕立て上げていること、そして何より興味深いと思われることは、仁寿堂の娘お浜を軸にしたプロットが加えられている点である。そこでは洋酒屋の若者は女郎買いにばかり熱を上げたのではなかったのだ。彼を破滅に導いたきっかけとなったのはお浜であり、今日高い評価を与えられている、殺人後東京の街中であてどなく逃げ回っている伝吉の心理描写も、時に彼女の視点を通して、悲しくも滑稽な様や追い詰められていく人間の絶望的な心境を浮かび上がらせているのである。伝吉が吉原通いの一方で抱き続けていたお浜へのひたすらな思い、これは柳浪の創作意図を考察する上で見逃せないことであろう。

神田淡路町の洋酒屋の主人伝吉は、二七歳、身長一メートルにも満たない小男で、このため「蜘蛛男」「侏儒」と陰口をたたかれ、口さがない子供たちから笑いのものにされている。また「変目」と言われるのは、彼の怪異な容貌のためである。

顔は丸顔にして、鼻は形よく、口元に愛嬌あれども、左の後背より頬へ掛け、湯傷の痕ひつゝりになりて、後背を堅に斜めに釣寄せ、右の半面に比ぶれば、別人なるが如く見ゆ。此にぞ、変目伝の綽名は附られける。態とらしく笑を含めば、厭ふべき目付いとど気味悪く、女童など親しまむ様なし。

このように嫌われたりしながらも「されど、口に毒を含まず、気軽に而も人と争そはねば、何方にても憎きものにはされず、物淋しき折など、遊ものとして待てる、事もありけり」と愛嬌を振りまき、周囲の者から親しみを持たれてもいる。こうした振る舞いをすることは、容貌・身体に障害があり、ために疎外され、差別されるものにとって、世間と衝突せず円滑に生きていくための処世術の一面を持つともいえるだろう。それが当人の意図とは裏腹に、時として周囲に卑屈な印象を与えたり、また露骨な笑いの対象とされることもある。

伝吉の場合は「幼時より友達に除ものにされ」たせいか、「物心つきては、人の我を侮り軽しめ、尋常ならぬを云ひ罵るが口惜さに」身を粉にして働いてきた。そのため主人の信用を得て朋輩五人のなかでいち早く店を持つことが出来たのである。そこには世間のやつらをいつか見返してやる」といった意識があったかもしれない。ともあれ障害を持つ身は伝吉を辛抱強く負けず嫌いの堅実な努力家にしたといえようか。そうした甲斐あって商売のほうは順調で「現金の貯蓄も相応に出来たれば、二間の間口を近き中に三間にして」などという話も出てくる。こうして経済的には一応成功したといえる立場に立つことはできた。この後、一人前の男として望むものは、やはり彼の母も氣をもんでいる「嫁の事」であろう。だが、嫁の話となると母の心配をよそに「何とも思はぬ気色」で、「此様男を亭主にする女が、何処にあるもんかね」と端からあきらかめ達観したふうを装ってみせるが、その実「世の人々の夫婦相携へて睦みたる、若き男女の相愛し相慕へる様など見聞に、流石情の春を催ほし、われ亦彼如くあらんにはと、物ほしき心の出ざるにはあらず」「我は所詮独身すべきものとして、世には生れ出しなるべし。女を見返りもせまじと決心しけるが、又手春を思ふ心こそ儘ならね」（傍点水野）と、屈折した思いの中に異性への憧憬を募らせているのである。そして、

息子の様子によって母も気づいたとおり、得意先の葉種店仁寿堂の娘お浜に思いを寄せていることがその後明らかにされる。「独立で店は張てる」伝吉にとって愛するものと一緒になって家庭的な幸福を勝ち取ることは悲願であり、「蜘蛛男」「侏儒」「変目伝」といわれる身にしてみれば、自分をひとかどの男として世間に認めさせるためにもこれは不可欠の要件であるといえよう。

そのお浜は両親と早くに死に別れ、兄の勝之助が親代わりとなって面倒を見ている。「容姿おしなべて十人並に勝れ」た近所でも評判の娘である。

秋のある日、仁寿堂では兄の勝之助、従兄弟でお浜の十六歳の誕生日が行われており、そこへ来合わせた伝吉もこの席に連なることを得た。お浜から勺をされれば「飲めぬ口ながら辞退もならず」二杯三杯とさかずきを重ねて、酔いにまかせてだれかれの別なく笑いかければ、「気味悪きながらも興ある」男で、周りの者たちからはすっかり「能き遊び物」扱いされる。

私は女に愛されず、優しき言葉を掛けらるゝ事なしと諦めたる伝吉、今しもお浜が我手を取ての言葉に、酔に心の春の萌せる折柄、迎へし耳に情ありと聞なし、うつゝ心になりてお浜を見れば、莞爾笑を含みし顔にほと茜さし、愛嬌滴るが如き眼して、屹度我を見居たりき。

いくら、お浜が勺をして、手も握ぎり、微笑みかけようと、お浜を含めた仁寿堂の者たちからすれば、伝吉など「えへく」「いひく」と薄気味悪く笑うを喜ばれる「能き遊び物」でしかないのである。「商売には目先き、随て利潤も尠な」くはないものの、「幼時より友達に

除ものにされ」てきた者には、異性とのやりとりとなるとまったく目先は利かず、「遊び物」扱いされているなどとは知る由もなかったようだ。障害ゆえに抱え持ってしまった未熟さが伝吉をして後の悲劇を起こせる一因となっているのは否定しようもない。

伝吉は、お浜の言動を読みきれずに、自分にも望みがあるのではないかと錯誤した期待を抱いて、明くる日より仁寿堂への日参を始める。こうした伝吉の態度からその意中を覚ったのが、この店で働く、主人とは従兄弟の定二郎である。定二郎は「何だ変目伝の侏儒め、人並にお浜さんを張に来る処が可笑い」とばかりに「調戲半分、お浜伝吉を恋へり」などと吹き込めば、伝吉はわけもなく騙されてしまう。お浜との仲を取り持つことえさに飲み食いされ、さらに吉原へも連れて行かされる。はじめは嫌がっていたものの度重なると「伝吉は早や夢の心」で、「後には我から定二郎を誘ふ事さへある様になり行たり」という具合に自ら深入りしていくのである。

仁寿堂に日参するきっかけとなったのは、酔い心の中で萌したお浜に對する「春」の情で、吉原へ通いつめることになったのも心の内にしまわれていたはずの「情の春」「春を思ふ心」である。この両者は同じものとみなしてよいだろう。これについて「もともと柳浪の恋愛観はきわみて封建臭の強いもので、恋愛即愛欲という考え方であった。」という塚越和夫の指摘がある。その指摘自体もつもではあるが、恋愛と愛欲を別のものとして考えるのは近代的な発想にとらわれた誤謬である。当時の日本では、女性に好意を寄せるにも性欲とプラトニックな愛とは未分化であった。これを切り離しにかかったのは、恋愛の神聖を歌い上げた北村透谷をはじめとするキリスト教の影響を受けた明治の一部知識人たちである。ちなみにキリスト教に根ざすヨーロッパ文化が霊と肉を分離したものとして捉えているのに対して、日本にあったのは性関係を包

み込んだ「色事」や「色好み」であり、こうしたものが一種の美意識として高められ「色道」という伝統文化となつて吉原をはじめとした遊廓に咲き誇つたのである。だから「恋愛即愛欲」という恋愛観は何も柳浪独自のものではなく、その当時であれば、硯友社をはじめ、まだ一般的なものであつたとみて差し支えなからう。

吉原などやはり「金が情夫なる好遇」をするところ。いかに「尋常ならぬ」者であろうとも、また世間から軽んじられもの笑いにされる者であつても、金さえあれば人並みあるいはそれ以上の待遇をされることもあるわけで、そうした意味で伝吉にはきわめて居心地がよい場所であつた。その一方、吉原へ通い続けながらも「お浜の事は露しも忘れしにはあらざりき」というように、お浜への思慕は変わることなく持ち続けている。これをお浜に対する背信行為とみなすのは同じく近代的な発想による謬見であり、伝吉の態度に特に矛盾があるというわけではない。つまりは吉原で体験した「夢の心」の延長線上にお浜との恋の成就を思い描がいているのである。実際のところは、お浜は伝吉の顔を見れば笑つて店の奥へ逃げ込む、互いに慕いあつてはいるはずなのに「しんみりとの情話も」せぬまま。これを「未通氣の羞かしきにや」ととるものの、当然のことながら現実にはお浜との仲など深まるはずがなく、満たされぬ思いばかりが募るのである。伝吉を吉原へ足繁く通わせるのはこうした進展しないお浜との関係に対する代償行為なのである。

遊びに慣ざる哀さには、云はるゝ儘に貪ぼられ、定二郎には例の一条頼みたる弱みに、時貸の二円三円置りて百円近くなりたれば、二百円近かりし貯蓄も夢の間に消失せ、問屋へ不義理の借も出来たる上、辛苦経営せし家さへも抵当に入れ、其返済期限も早や数日の間に迫り来りぬ。

『変目伝』論

当てにしていた金策も空振りにおわり、切羽詰まった末に、返済期限の当日夜、質屋伊勢屋の番頭を吉原へと連れ出して酔わせ、その帰り道の吉原田圃で殺害し金を奪い、そして逮捕、絞首刑となる。こうした伝吉の破滅への経路を塚越和夫は「愛欲→墮落→破滅」と図式化し、さらにこれを『変目伝』以後の「悲惨小説」にも広く適用している^①。ここで改めて伝吉の殺人に至る動機を検証してみたい。

いうまでもなく殺人は金を手にするためである。これは吉原通いへの執着というよりも、借金を返済できなければ苦勞して築き上げた店を失うばかりでなく、まもなくかなうはずと信じているお浜との恋も断念しなければならなくなるからだ。だが、事件当日の朝に、定二郎の嘘はすでにばれており、お浜には決まった相手がいることを伝吉は知っていたのである。伝吉にしてみればお浜との恋を果らせることは、変目伝などではない、埼玉屋主人伝吉を世間に認めさせることであるが、それ以上に世間からまともに相手にされず蔑まれてきた者にとつての恋の成就是、何ものにも代えがたい幸せであるのは間違いない。それゆえ破局という現実はやすく受け入れられるはずもなく、殺人後もお浜への恋の幻想にすがりつき、そこにあるうはずのない救済を求める。

お浜と兄勝之助それに下女のお鍋たちは花見へ出かけての帰りがけのたそがれ時、上野公園で伝吉を見かける。これは伝吉が番頭を殺した翌日のことである。

勝之助お浜等は伝吉を見失ひ、鐘声に驚きて走りし彼が様を笑ひ、彼の母が彼昨夜帰らざりしとて心配ること、且つ彼が今朝店に来りし折の挙動の尋常ならざりし事など、語り合つゝ歩む中にも、お浜は何となく気味悪く、夕嵐の別て身に染む心地し、清水堂を後にな

し、既に石阪に下らんとせる時、人あり背後に在り、

『お浜さん。』

呼掛たる声音は覚えある伝吉。お浜は覚えず叫びて兄が腕へ縋りつく。勝之助は妹を囲み、振返れば、伝吉悄然として立居たり。

『へ、へ、へ。』

『伝さんぢやないかね。如何為なすつた。』

『えー。』

『家へ帰りなすつたかね。』

『えー。』

伝吉は勝之助へ答へながら、其眼は兄の背後に齒の根も合はで、戦慄るお浜にぞ注ぎける。

勝之助はお鍋に睨せし、手もて後さまにお浜に教へて、先へ行けど命ずれば、お浜はお鍋と手を取り合ひ、石坂の過半は駆下り、三枚橋の此方、往来繁き辺に、兄を待合するべし。

伝吉は覚えす二三歩あゆみ出し、石坂を下り行くお浜に目も放たず、恍然として立たる顔色、勝之助は身柱寒き心地す。

もはや自分の店やお浜を失うどころではない、わが身の破滅が目前に迫っているのだが、それでもあきらめきれぬお浜への悲痛な思いを浮かび上がらせて見事である。やはりこのあたりは全編の白眉といえよう。

『変目伝』は愛欲におぼれた「片輪者」がしでかした惨劇とみられてきた。しかし、問題はそのような市井にありふれた話の中にあるのではない。お浜との恋は変目伝と呼ばれた男のもとに降りてきたいわば幻の蜘蛛の糸であったのだ。つまり、自身の不幸な境遇から抜け出し人並みの幸福を手に入れるための頼みの糸だったのである。逮捕後白洲へ引き出されてもなお「私の……女房とはなつて居ないけれども、約束をし

てあるお浜と云ふ娘があります」と口にする、このことばが事実ならざることとは当の伝吉自身十分承知していたにもかかわらず。『変目伝』という小説のいたまじさは、このようなひたむきな思いが世間からは障害を持つ身ゆえの無知と不慣れにつけこんでいいようにもてあそばれ、その挙句に希望を託した蜘蛛の糸が無残にも断ち切れ、身を滅ぼしていかなばならなかったところにある。いわば虐げられたものたちの上昇の望みをかけた途が断たれた絶望のなかで迎えた我が身の破滅というまさに悲惨としか言いようのない話である。これはまた柳浪描くところの多くの「悲惨小説」の基本的な構図をなしている。

その一例として『今戸心中』（明二九・七）のケースについて簡潔に述べてみたい。

吉原の花魁吉里は、惚れ込んでこの先一緒になることを夢見ていた客の平田とやむにやまれぬ事情で別れてしまい、悲嘆にくれた末に、これまで顔を見るのもいやでずっと振りとおし、そのため妻子とも別れ、破産してしまった美濃屋善吉と一転して懇意となり、二人は次第に常軌を逸した行動に走り、「絶望と絶望の間に立てる同情の果て」（『唾玉集』）の心中に至る。これについても塚越和夫は「愛欲↓墮落↓破滅」の図式を当てはめている。

苦界に身をおく遊女に突きつけられた現実とは、そこからの脱出を願うてすべてを託し惚れ抜いた男が目の前から消えてしまうということであった。そうした立場におかれた人間の失意をわれわれは十分に理解できる。深く傷つき悲しみのどん底に陥った者の自暴自棄な振る舞いを簡単に愛欲による墮落としかたづけられるわけにはゆくまい。ここにも『変目伝』同様、社会の下層からの脱出を願う一途な気持ちが閉ざされてしまった悲劇のテーマを見てとることができるだろう。ここで詳論するいとまはないが、『黒蜥蜴』（明二八・五）などこの他の「悲惨小説」にもこれと

同じような構図の指摘は可能である。

このように社会の下層にあるもの、虐げられたものの悲惨さをリアルに描き出したことで『変目伝』などの一連の「悲惨小説」は、当時提唱された「社会小説」の一角を形成し、またこの後の自然主義文学を準備した作品となったのである。

注

- ① 塚越和夫『『変目伝』の成立』（『日本文学』一九六八年八月）では、『変目伝』一篇のおもしろさは、やはり殺人を犯したあとの伝吉の心理の動きの描写にあるのだろう。「殺人を犯したあとの伝吉の不安動揺を説明抜きで描いたことは、当時の水準をはるかに越えた技巧」と評価している。
- ② 塚越和夫、前掲論文。
- ③ この点についての論述は、佐伯順子『恋愛』の前近代・近代・脱近代』（『岩波講座現代社会学』10 セクシャリティの社会学 岩波書店 一九九六年二月刊）などを参考にした。
- ④ 塚越和夫、前掲論文。
- ⑤ 塚越和夫『『今戸心中』について』（『日本近代文学』一九六九年十月）
- ⑥ この点については、水野洋「広津柳浪『今戸心中』」（『明治文芸館』III 日清戦後の文学新文芸の胎動 嵯峨野書院 二〇〇四年三月刊）を参照されたい。

本文の引用は『定本広津柳浪作品集上』（冬夏書房 一九八二年十二月刊）によった。

ただし旧字体は新字体に改め、振り仮名については省略した部分がある

（履正社高校教諭）